

令和元年度の学校評価結果について

広野小学校 寺奥 幹生

I 学校評価の実施にあたって

広野小学校では、令和元年度の学校評価を次のような方法で実施した。

- ①昨年度、児童、保護者、教職員でばらばらであった評価基準を「A：はい B：どちらかといえば『はい』 C：どちらかといえば『いいえ』 D：いいえ」に統一した。その上で、「A：はい」「B：どちらかといえば『はい』」を良い評価として捉え、それ以外は悪い評価（反省すべき項目）とし、その要因を分析した。
- ②アンケートを通じた児童、保護者、教職員の評価については、平成30年度との比較の上で今年度の教育について分析した。分析では、前年度と同様に評価が高いものについては触れず、前年度より優れていたもの、逆に劣っていたもの、前年度同様に評価の低かったもの、今年度の教職員が低い自己評価をおこなったものについて取り上げ、分析した。
- ③アンケートの項目のうち、児童、保護者、教職員の3者に類似した内容がある場合は、3者のとらえ方の違いも分析する上での判断材料とした。教職員がよくできていると自己評価していたり、継続的に特に力を注いでいると考えている項目でも、児童や保護者が低い評価をくださる場合がある。そうした場合、指導のつめやアピールの仕方も含めて大いに反省する必要があるからである。
- ④上記のような方法でまとめたものを、学校を外部から観察していただいている3名の学校評議員の方に事前に送付し、3月初旬の学校評議員会の席でご意見を伺った。ここでご指摘いただいた内容についても教職員の反省を加え、最後に掲載した。
- ⑤こうしてまとまった学校評価については、今年度中に広野小学校ホームページで公表する。

上記の方法で分析したことを、次に述べる。

II アンケート結果の分析

1 「勉強時間、自分の考えを發表している」について

(アンケート該当項目：児童2, 保護者1, 教職員7)

前年度と比べ、児童の自己評価が下がった項目の1つである。保護者の評価は、僅かながら昨年度を上回っている。一方、教職員の評価は概ね高く、児童の自己評価との食い違いが認められる。こうした食い違いは、次のようなことを理由に生じると考えられる。

- ①児童の中には「自分の考えを發表する」という課題に関して、自分に対する基準値が高く、少しくらいの發表回数では満足できないものがある。
- ②逆に教師は、指導する内容により、必ずしもたくさんの發表回数を求めない場合もあり、教科学習全般をトータルで考えた場合、おおむね満足できるレベルで児童からの反応が得られていると感じている。

ともあれ、發表回数の多寡はともかくとして、分かる授業を保障し、児童に確実な学力を定着させることは、学校教育の根幹に関わる事項である。我々教師は、このアンケート結果を謙虚に受け止め、より分かりやすい授業を目指して研修に励まなければならない。

2 「勉強していることはよく分かっている」「勉強時間に新しいことを知るのが楽しい」

(アンケート該当項目：児童5, 6, 保護者2, 3, 教職員7)

これも1で取り上げたのと同様、学習面に関する項目である。これに関する児童の該当

項目は5, 6だが, いずれも若干良くなっている。しかし, 保護者の該当項目3では, 逆に昨年度より評価が下がっている。まず, 児童がこの質問項目に対して, 「はい」もしくは「どちらかといえば『はい』」と答え, マイナスの評価をしていないことは我々教師にとってはひとつほっとできる結果ではある。教師は, 少人数の良さを生かして個別学習を充実させるべく日々児童の指導にあたっている。一方で少人数であるがゆえに実現が難しい児童相互の意見の交換, 思考やイメージの広がりへの乏しさを補うべく, 様々な手立てを講じている。今回の児童からの結果は, そうした教師の取り組みに対して, 児童から一定の評価を得たと捉えることができる。しかし, 一方保護者からの評価は, 下がっている。とりわけ「授業内容は, 子どもたちにとって分かりやすいものでしたか」の問いに対して「はい」という回答が減ると共に, 少数とはいえ「どちらかといえばいいえ」の回答が出たことは深刻に受け止めなければならないことである。おそらく保護者の皆さんは, 今年度教室で見た参観授業の様子を思い浮かべながら, これに答えられたのだろう。背後から第三者的に授業を眺めたとき, 授業を行う当事者以上に多くのものが見えてくることがある。今後は, 管理職の巡視の機会をより多くすると共に, 研究授業や授業参観など, 「人に見られる」機会をより多くして, 教師相互に切磋琢磨していける職場環境を構築していかなければならないと考える。

3 「家や学校で読書ができている」「家でも自分から進んで宿題をしている」について (アンケート該当項目: 児童3, 4, 保護者5, 6)

これも, 広い意味で学習に関わる内容である。児童に関しては, 若干昨年度より向上しており, 一方, 保護者の評価は, 昨年度同様芳しくない。昨年度は, 多くの児童が自分から進んで宿題や読書をしているという自己評価をしているのに対して, 保護者はそうは見えていないという認識のずれがあった。そして, そのずれの要因を, 児童は読書, 宿題, 自主学习等をしているが, それは学校や学童でしているのであって, 保護者の目が届く家庭ではしていないからではないかと推察し, その対策として必ず日記, 音読は家でするように指導してきた。しかし, この結果である。残念ながら, この対策はあまり効果がなかったといえる。そこで, 来年度は次のようなことを実施していく。

- ①学校においては教師と児童が, 家庭においては保護者と児童がたとえ短時間であっても一緒に読書をする時間をつくり, 読書の習慣化を図る。
- ②テレビ, ゲーム, スマホなど, 家庭での読書や学習時間を奪う要因となっているものについて, 児童, 保護者, 教師が一体となってそれらの使用時間・視聴時間を決め, 児童に守らせるようにする。
- ③教師は宿題を出す際, 教師の支援がなくても自力でできるものであるかどうか, 量的に適切かどうか等を考慮する。
- ④自主学习については, 優れた自主学习をしている児童のノートを掲示したり, 仕方が分からない児童にアドバイスしたりして, 継続的に効果的な自主学习ができるよう促していく。

4 毎日朝ご飯を食べている

(アンケート該当項目: 児童7)

これは, 前年度より良くなった項目である。その要因としては,

- ①前年度以上に保護者の方が朝食の重要性について意識し, 家庭で朝食をきちんと摂るよう指導してくれるようになった。
- ②児童アンケート8の項目が示す通り, わずかだが早寝早起きの習慣化が前年度より向上し, 朝食を摂る時間的な余裕が持てるようになった。

などが考えられる。いずれにしろ, 集中力の高い, 充実した学校生活を過ごすためには朝食の摂取は不可欠なので, 学校でも機会あるごとに指導をしていきたい。

5 早寝早起きをしている

(アンケート該当項目：児童8)

4でも触れたが、この項目については、前年度より若干数値が上がっている。しかし、「どちらかといえば『いいえ』」もしくは「いいえ」を選択した児童も数人おり、この重要さが十分に浸透しているとは言い難い。これに関しては保護者の協力も不可欠なので、学年部会や個人懇談を通じて家庭でのご指導をお願いしていきたい。

6 先生や友だちにあいさつができています

(アンケート該当項目：児童10, 保護者7, 教職員16)

これは、今年度最も重視してきた項目である。集会がある度に、管理職や生徒指導が挨拶の大切さを説いてきたし、担任の先生方もそれぞれのクラスで伝えてきた。また、職員室に入る時や廊下等ですれ違った時に気持ちの良い挨拶ができていた児童に対しては、過剰なくらいの表現で褒め、意識を高めてきた。結果として、児童、保護者、教師とも、昨年度より高い評価を施したことは、4月当初から学校全体で焦点化して指導してきた1つの成果と考えられる。しかし、現状のあいさつで満足しているかといえば、おそらく保護者の皆さんも、教職員も首をかきげたくなるのではないだろうか。時間帯により、場所により、十分でないと感じることも少なくないからである。また、個人差が比較的大きく、相手の目を見て大きな声で言える児童もいれば、目を合わさずに小声で言うのが癖になっているような児童も相変わらず散見する。今年度の成果をよい挨拶元年というくらいに捉え、今後とも保護者の皆さんと共に根気強く指導していきたい。

7 他の学年の子と一緒に活動するのは楽しい。

(アンケート該当項目：児童14)

この項目については、昨年度も高い評価を得られていたが、今年度いっそう評価が高まった。これは、1つには社会性やリーダー性を養うために、異年齢集団である縦割り班活動を昨年度より増やしたこと、2つにはその縦割り班活動において、自主性、自発性を高めるために、教師が介入せず児童に任せる部分を多くしたこと、さらにはそんな中で高学年の児童が低学年の児童に対していつも優しく接していたことなどが、その要因として挙げられる。特に今年度初めて運動会種目の1つを児童に任せ、教師の支援なしに大成功を収めたことは、縦割り班活動の1つの成果として大いに賞賛できることであった。

この成功の要因には、代表委員会の運営方法を改善したことが挙げられる。昨年度までの代表委員会では、自分の個人的な意見を述べる児童が多かったが、今年度はそこが改まった。4・5・6年の児童は、学年の代表ではないが、縦割り班の「代表」として低学年や中学年の意見を集約し、会議に臨むようになったからである。結果として、事前の縦割り班での話し合いでは、高学年児童の司会進行のもと、低学年児童でも学校行事等について積極的に意見が言えるようになった。また、高学年の児童にとっては、中学年や低学年の立場になって物事を考える習慣が養われ、広い視野から物事を考えられるようになってきた。次年度以降も、この形で代表委員会を運営していきたいと思う。

Ⅲ 学校評議員の方によるご指導

本年度も、学校評議員の方を招いての会合を1学期と3学期に実施した。

1学期には、昨年度の本校の概要を振り返ると共に、今年度の学校経営の重点課題を学校長が伝え、折に触れ達成状況をチェックしてくださるようお願いした。

3学期には、1月中に校内でまとめ、事前に送付してあった「令和元年度の学校評価の

まとめ」をもとに、1年間の総括をしていただいた。特に気になるところはなく、穏やかな教育活動が営まれていたとの感想だった。

IV 令和2年度の具体的な取り組み

今回の学校評価の結果を受けて、令和2年度は次のことを重点課題として取り組んでいく。

1 学力の向上に向けて

(1) より分かりやすく、楽しい授業をしていくために

- ①児童が発表したくなるような発問の仕方を工夫する。
- ②授業中の児童の様子を絶えず観察し、発問や説明の仕方、資料の示し方等を柔軟に改め、より良い児童の反応や表情が見られるよう努める。
- ③管理職が各クラスの授業を巡視し、指導する機会を多くするとともに、教師同士で相互に授業を見せ合ったり、評価し合ったりする機会を多くして、教師の授業力の向上に努める。

(2) 家庭学習の充実に向けて

- ①授業中の児童の表情等をよく観察し、家庭において自力で十分できる課題を宿題として与えられるよう努める。
- ②家庭での読書量を増やすために、学校では、読み聞かせの時間や児童と教師と一緒に読書する時間を設け、児童に読書の楽しさを味わわせるよう努める。
- ③家庭での学習や読書の状況について、保護者の皆さんと情報交換しながら、保護者と教師が一体となって指導できるよう努める。

2 基本的な生活習慣の向上に向けて

(1) 規則正しい生活を習慣化させるために

- ①ゲームをしたり、スマートフォンを使ったりする時間がきちんと守れるよう保護者と連携しながら継続的に指導していく。
- ②早寝早起きが励行できるよう、毎朝の健康観察の時間や帰りの会などにおいて、常に指導していく。
- ③活力の元となる朝ご飯をきちんと食べて来られるよう、保護者と一体となって指導していく。

(2) より気持ちのよいあいさつができるようにするために

- ①前年度の成果を踏まえ、一層よいあいさつができるよう学校全体で取り組んでいく。特に児童会に働きかけることにより、上学年児童が下学年児童を指導したり、同学年同士で注意し合ったりすることが自然にできるよう、あいさつに関わる児童の生活環境を整えていく。
- ②学校評議員の方や地域の長寿会の方々などにも学校の取り組みを伝え、地域住民の力もお借りしながらより良いあいさつができるよう努める。